中国における「明末農民戦争史研究」の最近の動向

吉尾　寛

はじめに

一九八七年九月五日から九日にかけて、中国四川省綿陽市において、「第二次全国明末農民戦争史学術討論会」が挙行された。中国の研究機関所属の研究者・学生、地方行政機関下の学芸部員等合計一四〇名に加えて、日本からは、東京女子大学・山根幸夫、大阪大学・谷口規矩雄、東京都立大泉高校・佐藤文俊、江南女子短期大学・吉尾寛が参加した。「明末農民戦争史学術討論会」第一回は、一九八五年に河北省・秦皇島で開かれたが、(1)外国人が参加したものとしては本会が最初である。

具体的日程等は、末尾折り込みの〔表1〕・〔表2〕のとおりである。会は、四川省社会科学院歴史研究所が運営の中心機関となり、中国人民政治協商会議綿陽市委員会・同梓潼県委員会が全面協力する形で進められた。四川省社会科学院は、近年張献忠関係の研究を多数公にしており、その一部は既に日本にも知られている。(2)運営の統括も、研究の推進者の一人王綱副研究員(3)がそれにあたった。一方、綿陽市及び梓潼県は、張献忠の政権樹立の時期を中心に、明末農民戦争の舞台となった地区である。期間中（九月六日）に行われた両委員会主催の梓潼県大廟（張献忠廟）等の史跡見学――何れも外国人の立ち入りは最初――は、その一端を紹介するものであり、同様（同八日）の川劇「張献忠」の観賞に際しては、張献忠が当地の住民の馴染み深い歴史人物であることが窺われた。因に、本会への参加が初めての訪中でもあった私においては、これらの行事を通じて、現地の数多くの人々の「熱烈歓迎」

に新鮮な感動を以て遭遇した次第である。

但し、学会の状況については、私なりに事前に考えるところがあった。明末農民戦争史研究は、これまで中国農民戦争史研究の重要な一環をなし、その農民戦争史研究は、「解放」後の中国の歴史学界をリードしてきた重要な分野の一つであった。文化大革命の時期には、政治路線の対立をも背景として、理論問題についての論争が多数且つ激しく繰り広げられた。(4) しかしながら、ここ数年、中国側で発行される学会誌には、明末農民戦争史に関する論稿が頓に減っている。だがその傍らで、資料の面では、精力的な整理・出版の動きが伝えられている。(5) かかる学界の動きは、いかなる問題意識をその根底にそなえ、又研究の展望をどのように切り開こうとするものであるのか。また、従来日本に知られる当該の研究者は、中国側の著作移出の制限から、特定の著名な人物に限られている感がある。研究者の全体をとってみた場合、いかなる研究者の層がそこに存在し、各々どのような形での研究が進められているのか。これらの点に些かなりとも答えを見出すことが、私自身の本会出席の目的であった。

即ち、本稿は、「第二次全国明末農民戦争史学術討論会」（以下「討論会」と略称。）の特徴を多面的に明らかにすることを通じて、中国における明末農民戦争史研究の最近年の動向の一端を紹介するものである。筆者ら日本人研究者は、期間中、全体会及び第四部会（部会数四）に出席した。紹介に当たっては、提出論文のみならずそれらの会に見える人についての特徴（地域・年齢・所属機関）、或は論文・発言内容に見る一九五〇～七〇年代の主要な論点との差異に特に留意し、新しいと思われる論点・視点については極力網羅的に挙げるように努めた。(6)

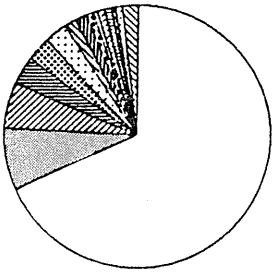
※尚、本文中に論文名及びその著者名等を引用する場合は、全て〔表1〕・〔表2〕の論文番号を以て表示した。

一　研究主体

「討論会」への出席者、或は論文提出者の所属地域・年齢・所属機関の数量的割合を表したのが、次頁以下の五つの円グラフである。

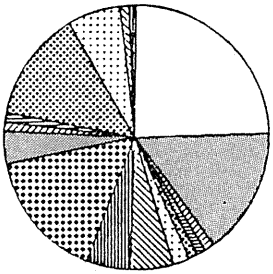
先ず、全体の地域構成を見ると（グラフ1）、会の運営関係者の所属地域を反映し、四川省からの参加者が圧倒的に多いことがわかる。その四川省関係者の内訳を示したのが、グラフ2である。運営機関・協力機関たる社会科学院・政治協商

1 出席者の地域分布



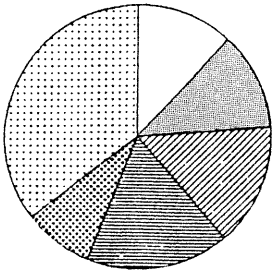
項目名	人	%
四川	95	67.9
河北	11	7.9
北京	8	5.7
河南	5	3.6
湖北	4	2.9
遼寧	4	2.9
吉林	2	1.4
陝西	2	1.4
山東	1	0.7
山西	1	0.7
貴州	1	0.7
湖南	1	0.7
江西	1	0.7
南京	1	0.7
不明	3	2.1
合計値	140	

2 四川省関係者の内訳



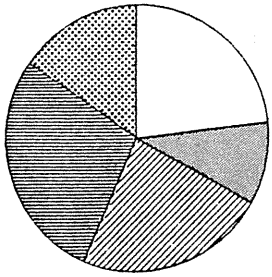
項目名	人	%
社会科学院	23	24.2
綿陽市政協	15	15.8
〃 志辦	1	1.1
〃 人大常	1	1.1
〃 市政府	1	1.1
梓潼県政協	2	2.1
〃 社科聯	5	5.3
四綿梓中共	5	5.3
大学	15	15.8
綿陽市学校	4	4.2
省歴史学会	1	1.0
省志編纂委	1	1.0
他県志辦等	13	13.7
出版機関	6	6.3
四川省電台	1	1.0
不明	1	1.0
合計値	95	

3 出席者の年齢



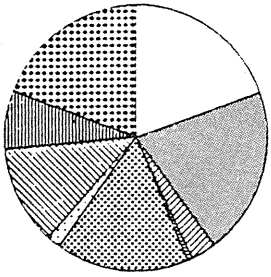
項目名	人	%
20歳代	16	11.4
30歳代	17	12.2
40歳代	21	15.0
50歳代	24	17.1
60歳代	12	8.6
不明	50	35.7
合計値	140	

4 発言・寄稿者の年齢



項目名	人	%
20歳代	9	23.1
30歳代	4	10.2
40歳代	9	23.1
50歳代	11	28.2
60歳代	6	15.4
合計値	39	

5 出席者の所属・身分



項目名	人	%
大学	27	19.3
社会科学院	29	20.7
専門学校等	4	2.9
歴史博物館	1	0.7
地方学芸部	23	16.4
軍事機関	2	1.4
出版編輯部	17	12.2
研究生等	10	7.1
その他	27	19.3
合計値	140	

会議綿陽市委員会が全体の約四割を占めており、以下大学(四川・四川師範・四川教育・四川建材・四平師範・西南師範・重慶師範・南充師範)、そしていわば、地方行政機関の学芸部が続いている。学芸部とは、その多くが地方志の編纂委員会(「地志辦公室」)を指すが、それらの「討論会」への関わりについては後で述べたい。参加者全体の年齢構成に関しては(グラフ3)、不明な点も少なくないが、嘗てエネルギッシュに自説を掲げた五〇歳・六〇歳代の者が、明らかに上位を占めている。と同時に、二〇歳代から四〇歳代にかけての研究者も、各々相当数を占めていることがわかる。このことは、全体会で発言した者或いは論文を提出した者の年齢をとって見ると(グラフ4)、一層顕著であり、明末農民戦争史研究が、より若い世代に確実に受け継がれつつあ

ることが窺われる。彼らの研究には、後に述べるような従前の問題意識に囚われぬ発想や、社会経済史研究の成果を積極的に取り入れる姿勢が見出されるが、主な作品に共通して言えることは、特定地域の情勢から農民戦争全体の性格をさぐる視点が認められることである。全体会においても、郷紳・土司・官府・民衆相互の具体的な社会的関係から、特定地域の張献忠反乱の展開のメカニズムを解明する精緻な研究が発表された〈11〉。更に、院生クラスの研究の中には、出身・所属機関の地域史料を丹念に調査・整理し、それに依拠して、懸案になっている問題にアプローチし、又反乱情勢の新局面を提示する研究なども出てきている〈10・18〉。参加者の所属機関については（グラフ5）、社会科学院、大学が上位を占めている。先の四川省の諸機関を除けば、中国・河北・山東・河南・遼寧・陝西・吉林等の社会科学院の研究員・研究生が、また北京・北京師範・同古籍研究所・南開・同歴史研究所・天津師範・鄭州・河南・山西・陝西師範・江西師範・貴州等の大学の教員乃至院生が参加している。但し、これら研究機関外からの出席も少なからずあったことが、本「討論会」の最大の特色の一つであったと言えよう。(7) 即ち、先にも触れた地方行政機関の学芸部である。具体的に言えば、四川省については、省志編纂委員会〈19〉、成都市社会科学研究所〈同上〉、西充県人民政府〈20〉・同県志辦公室〈21〉、大足県政治協商会議〈22〉、金堂県労働局〈23〉及び石柱県秦良玉史編輯委員会〈24〉が、又湖北省に関して、通城県志辦公室〈26〉・同通山県（名称不詳）〈27〉が、各々論文を「討論会」に提出している。これらの地域は、何れも張献忠・大西軍或いは李自成・大順軍の華々しい活動の舞台となった地であり、とりわけ西充県は張献忠の死地として、通山県は李自成の死地として知られる。又石柱県は、明朝の土司で農民戦争の鎮圧にも関わった女将秦良玉の故郷である。西充県では既に『張献忠在西充』（西充県文教局・西充県志辦公室・西充県地方志協会編一九八七・七）を刊行しており、石柱県の場合には、各種上級機関（研究機関）の協力のもとに『秦良玉史料集成』（四川大学出版社一九八七・八）を刊行している。(8) 所謂郷土史の編纂を精力的に進めるこうした地域においては、明末農民戦争史に関する史実の考証を重ね「討論会」にてその成果の一端を発表したのである。冒頭に述べた近年日本に伝えられる明末農民戦争史についての資料出版の、見逃せぬ原動力がここにあると言えよう。(9) いま一つ所属機関に関して注目されるのは、軍事関係者の出席が見られることである。大会発言〈3〉・提出論文〈30〉、

何れも農民軍の戦術・戦略、殊に一九五〇年代以降研究機関等で一貫して取り上げられてきた「流動作戦」について分析したものであり、従前の説を踏襲する形で、「流動作戦」の反乱情勢拡大に対する積極的役割、片や所謂「流寇主義」（根拠地・後方建設の軽視等）としての消極的役割を明らかにしている。

即ち、中国の明末農民戦争史研究は、一九五〇年代から七〇年代にかけて、大学等の研究機関を主要な場として進められたものであった（少なくとも私には、そのように捉えられた）。だが、ここ八〇年代後半、その研究者たちを生の形で見る限り、嘗ての状況は原型として在るものの、更に三つの研究主体についての核が在るように思われる。つまり、地域研究を初め新たな方法を積極的に取り入れる研究機関所属の若手研究者の一群、農民軍の戦術を専ら分析する軍事機関所属の研究者、そして、地方史実の考証に重点を置き、広範な研究の裾野を形作る地方行政機関の学芸部等が存在すると。

二　主要な論点と問題意識

では、こうした研究主体においては、いかなる論点が提出されており、又どのような問題意識が見出されるのか。この点を可能な限り明らかにする為に、先ず、五〇年代から七〇年代にかけての明末農民戦争史研究の概況について極く簡単に振り返っておきたい。(10)

当時の研究は、第一に、「封建社会」下の全農民戦争についての総括的な特徴に基づいて、明末の農民戦争の歴史的性格を論ずるものであったと言える。総括のポイントは、(1)農民戦争が農民階級と地主階級の間の階級闘争である点（但し階級内の諸階層のもつ特徴を考慮に入れた議論は行われず）。(2)「歴史作用」即ち歴史の発展に対する農民戦争の役割。具体的には「発展の原動力である」、「統治階級の譲歩政策を促した」、「（但し）流寇主義による破壊性は見逃せない」等々が説かれ、文化大革命期には、「原動力」説が主流をなした。(3)農民軍の「流動作戦」の性格。軍中の「遊民」層が「流寇主義的思想」を生み出し、そのことが農民軍をして「根拠地」の建設を軽視せしめたとする。(4)短期間ながら樹立された「短期政権」の性格。一定の経済基盤を備え、「地主階級」からの政権奪取を意味する「農民政権」説、片や経済基盤を持たず「封建的生産関係の矛盾調整」を行うのみの「封建政権」説が、主に唱えられ、文革期（特に一九六四・五年以

後）は、「農民政権」説が圧倒的多数を占めた。即ち、これらの見解を無媒介に適用する形で、明末農民戦争の「歴史作用」・「流動作戦」・「大順政権」について論じられた。第二に、明末農民戦争史・「大順政権」の固有の問題としては、「均田」スローガンの解釈がある。地主階級の「儒教的粉飾」、農民階級の土地均分への願望の反映、賦役負担の均等化、一部の地主占拠地に対する均等分割等々の意見の分岐が見られたが、反面それらは、均しく、反乱時の史料に依ってのみ「均田」の内容を把握しようとする志向をもっていた。第三に、いま一つの固有の問題として、「地主階級知識分子」或は李岩についての評価がある。「知識分子」それ自体の農民戦争に対する客観的役割は、農民軍指導者（農民階級）の「皇権主義思想」を際立たせるなど政権内における「封建思想」の拡大にあるとされ、「短期政権」が「地主政権」に転化する重要な契機とも見なされていた。こうした問題意識をもとに、「大順政権」に参画した李岩が農民階級、地主階級何れの立場に立つ者であったのかが議論され、(1)農民軍指導集団の一人、(2)地主階級から農民階級の側に移った者、(3)終始地主階級の立場に在りながら参加後一定の貢献をなした者、等々が説かれた。但し、七〇年代後半、李岩の存在自体を疑問視する論文も発表されるに至った。

以上の論点に関して、一九八七年の「討論会」における出席者、或は提出論文は、いかなる見解を示していたのであろうか。

歴史作用　文革期に主流を占めた「原動力」説は全く認められず、逆に、明王朝の倒壊が頻りに強調されたり〈29〉、或は明朝の「反動地主階級」を打倒して清朝統治者の支配政策を緩和するという嘗て亜流であった「譲歩政策」説が見出される〈5〉。但し、近年中国の学界で説かれている《封建社会長期延続》論の影響ははっきりと見られ、かかる論を考慮に入れた上で、農民戦争を、長期封建社会の下での社会発展の集中的表現と積極的に捉えるものもある〈6〉。部会の討議においても、農民戦争の「両義性」（歴史の推進性と後退性）を堅持する立場が多くの出席者から説かれたが、全体会で基調報告に当たる発表を行った鄭州大学・王興亜教授は、「歴史作用」をはかる第一の基準は生産力を発展させたか否かにあるとし、農民戦争はその根本的な方途ではない――例えば資本主義の萌芽を促すものでない――と結論づけている〈2〉。しかも、《封建社会長期延続》なる点に《君主専制国家の再生》という論点を重ね併せ「歴史作用」を示した新種の研究が、

今回若手研究者から発表されている〈15〉。即ち農民戦争とは、民族戦争と同じく、国家機構・「特権階層」の肥大・膨張とそれに伴う財政危機の悪循環から必然的に起こる「周期性的大動蕩」である。その打倒目標も個別の地主や商人ではなく、寧ろ目前の「君主集権国家」と官吏に在り、そして、かかる農民戦争の過程から又「君主集権国家」が生み出されたという。《長期延続的封建社会》における「歴史作用」が中国でどのように語られているか――このことは「討論会」出席に際しての私の最大の関心事であった。部会においてこの点の私の質問に答えて下さった多くの先生方には、深く感謝するものである。だが率直に言って、この問題に関しては個々の研究者が各々独自の方法でとりくんでいる段階と感じられた。と同時に、以下に示す所の明末農民戦争の特殊・具体的なあり方を探る大方の作業が、「歴史作用」を再提起する上で、地道ながら不可欠な営みとして捉えられた次第である。

農民軍の活動と組織　前章で述べたように、「流動作戦」の評価は、「流寇主義」の理解とも合わせて、従前の説がそっくり踏襲されている。但し、農民軍の活動をその組織形成と関連づけて考察した若手研究者の論稿の中には、最近日本でも紹介された「郷族」[11]の役割に着目するものがある〈31〉。農民軍は、反乱発生地における「宗族関係と郷里関係の結合体」としての「郷族」を基盤に形成されたとし、そのことは軍内に同姓・同郷の者が多数居たことに端的に現れているとする。又「郷族」的基盤は軍内の結束強化に積極的作用を及ぼす反面、自己集団中心の考え、末期には戦線から順脱して故郷に戻る者を生みだす原因ともなったと説く。農民軍成員間の血縁的、地縁的結合については従来からも指摘されており、当該論文が「郷族」という概念を改めて用いる理由を明確に示しているとは言い難いが、「郷族」は「一般地主」（非特権地主層。事例は後掲）の基盤として注釈抜きに使われている場合すらある〈28〉。正に「郷族」への着眼は、明末農民戦争史研究が、今後、地域社会に関する明清社会経済史研究の成果を吸収し進められることを予測させるものではあるまいか。

大順・大西政権の性格と施策　「歴史作用」の場合と同様、文革期に主流をなした見解＝「農民政権」説は殆ど示されていない。「農民革命政権」などの言葉が使われていないわけではないが、それは、「知識分子」の参加を重要な一契機とし、又封建的官僚機構に照らして樹立されたという、極めて「地主政権」説に近い内容と判断される〈32〉。但し、こうした見方の変化が、明末農民戦争における農民階級と地主階級

の対立の局面を不鮮明にし、前述の「歴史作用」を一層不明確にするとは、速断に過ぎると考える。即ち、「短期政権」の施策を分析する論稿においては、農民軍は地主階級一般でなく、その中の特定の階層――郷紳等の特権を保持する階層を、主たる攻撃対象としていたとする見方が明らかにある。例えば、「追贓助餉」は、「封建官僚・豪紳」に対する経済的政治的打撃を与える目的のもので、故に兵餉補充は二義的でその実際の効果も少なかったとする〈8〉。また、「均貧富」の施策を蒙った者を網羅的に抽出し、その数量を明らかにした研究にあっては、優免特権を保持する「貴族地主」が、特権を持たず「社会基層」乃至「地方郷族勢力」を形成する「一般地主」より遙かに多かったという見解〈28〉が提示されている。「均田」に関しても、被兼併地の貧農への返還と共に、明の宗室・「官僚地主」の荘田の占拠及びそこにおける兵糧の為の耕作(「屯種」)が注目されている〈32〉。そしてテーマの如何に関わらず、提出論文の多くが、明末の地主階級を均質なものとして捉えておらず、「官紳・縉紳地主」・生員等々日本でいう郷紳層、「平民地主」・「一般地主」等々日本でいう手作地主・自作農層の二類型を想定している。現時点で敢えて言うならば、明末農民戦争における基本的対立の構図は、農民階級対地主階級から、農民階級対郷紳層として捉えられ始めているように思われる。しかも、こうした関係を包含する当時期の複数の政治勢力(農民軍・地主層・明朝政府・清軍)の絡みから、大順政権並びに大西政権の短命の原因を捉えようとする志向も強まっている〈4〉。嘗て「政権」の短命とは、「政権」自体の問題――地主政権への転化或は農民軍の「皇権主義」・「流寇主義」に専ら由来するものとされていた。確かに提出論文の中にも、「流寇主義」〈8・9・30・39〉、「皇権主義」〈33〉、又「政権」官員の孤立分散〈4・39〉或は統治基盤の未成熟〈37〉、更には明朝復興を目的とした呉三桂の清軍への投降〈34〉等々が記されている。だが、それらに並記され共通して説かれる原因こそが、明朝倒壊後、農民軍の「追贓助餉」等を契機とした「官紳地主」を中心とし、「平民地主」をも巻き込む《地主階級》の「政権」に対する叛起〈4・8・34・39〉、或はその顕著な行動形態たる堡寨形成〈18〉なのであり、更にはかかる《地主階級》の清軍への合流なのである。

「均田」の解釈　前掲の王興亜教授の発表において、明末農民戦争が当時期の生産力の発展に寄与するものでなかったとする根拠の一つは、「均田」スローガンが実現されず、それによって「封建的搾取制度」を排除できなかった点にある〈2〉。

「均田」に関しては、文革の終結直後より、いわゆる荘田の占拠・屯種説、貧農への返還説が出されていたが、「討論会」の状況から見る限り、文字どおりの土地均分という解釈は、学界の中で殆ど説かれなくなったと推察する。但し、他の従前の説を踏襲するにせよ、それを導き出した方法そのものに対しては、批判的な継承が行われている。「均田」とは土地所有権に関わるものでなく「均役」を意味すると結論づけた「討論会」提出論文中の唯一の専論〈35〉は、「均田」が「地主階級知識分子」によって出されたものである以上、当代の地主階級がそれまで行ってきた賦役制度改革の内容に沿って解釈すべきとし、その立場から、反乱時の史実に留まらず、当該分野を中心とする「明代社会史」研究の近年の成果を意識的に取り入れる方法を強く示している。

李岩の評価　全体会・提出論文何れにおいても、関心はその存在の如何に集中している。他方、彼が地主階級、農民階級何れの立場に立った人物であるかという従前の問題は、李岩を含めた「地主階級知識分子」全体に関する問題として新たに議論されるようになっている（後述）。李岩の存否については、北京における彼の居住地を外国（朝鮮）の史料をも用いて特定した研究〈36〉がある外、前章でも触れたように、若手研究者による、李岩の郷里河南省杞県の所謂郷土資料を用いた研究が発表されている〈10〉。特に後者は、杞県の「望族」李氏の族譜に依って李岩なる人物を割り出すとともに、県志の全刊本の検証をもとに李氏をも含む複数の有力宗族の当県における結合・確執の過程を解明し、かかる郷里の動向の中に、李岩が歴史上消されていった原因を見出そうとする。

地主階級知識分子・地主階級の役割　「政権」が短命であった根本的原因が「官紳地主」層乃至「平民地主」層の叛起に在るとする見方の裏には、農民軍（農民階級）と地主階級との連合が「政権」存続の為の必要条件とする見解が窺える。この点を知識分子の方面から極めて明瞭に表しているのが、李自成と朱元璋の比較研究である。そこには先ず「地主階級知識分子」は「独立階級」として国家を治めることはできないが、いかなる「統治集団」（農民軍・満洲貴族）も彼らの補佐を受ける必要があったとする原則的な見方が、提出されている〈37〉。つまり、朱元璋は声望ある「儒士」を多数吸収し、それを通じて広範な農民の支持を獲得したことが、彼の「政権」の存続を可能にし、片や李自成は、李岩等の知識分子の役割を十分認識せず、それ故「封建地主階級」の鎮圧を蒙ることになったと説いている〈37・38〉。そして、提出論文の内の一定

数を占めた地主階級に関する専論においては、地主階級と農民階級の関係についての新しい見方が、或は地主階級の「歴史作用」に対する積極的役割が示されている。論文〈39〉は、農民階級と地主階級は常に絶対的対立関係に在るのでなく、例えば、個別的には「富家巨室」が「佃客」へ、「一般農民」が「地主縉紳」へと地位の昇降が起こった。かかる流動的な位置関係が、知識分子の一部を農民軍に参加させることを可能にしたが、結局「追賊助餉」策等の断行が、「北方地主階級」の叛起をまねいたとする。更に〈40〉は、「漢族地主階級」を本来「社会領導階級」と明確に規定。明末、彼らは「全体(国家?)利益」と「個別(個人・家族?)利益」の矛盾の中でその指導能力を喪失し、自身の「個別利益」を図る立場から、「政権」へ或は清朝へと自らをかり立てたとする。

民族戦争との関係　明末の政治勢力の動向が、今日、本研究において注目されてきていることは先に述べたとおりであるが、それに伴い、明末農民戦争と漢族対満洲族の民族戦争との関係に対しても、新たに多くの関心が寄せられているように思われる。部会討議の中でも、階級矛盾のみならず民族矛盾も明末清初の歴史を推し進めたとする主張が少なからず出され、全体会報告・提出論文に至っては、民族戦争・清朝建国の《歴史作用》をこれまでになく高く評価するものが認められた。論文〈6〉は、農民戦争・民族戦争は互いに影響を及ぼしつつ客観的には共に明朝を滅亡に追いやる役割を担ったとし、最終的には、大順政権に叛起した「北方漢族地主階級」が、充分な後方を備える満洲族政権に帰順したという。また〈33〉は、清軍入関前の当該政権を「満漢聯合体」と規定するとともに、清朝の中国統一は当時の「外国資本主義勢力」の侵入を阻止する役割を果たしたと述べている。

総じて言うならば、一九八〇年代後半の明末農民戦争史研究には、明末・清初期或は明代の具体的な政治過程・社会経済状況に即して当該農民戦争の性格をさぐり、又それによって嘗ての問題提起にも応えようとする志向が明らかに在る。と同時に、それらが尚一つの形を為すに至らず、更には、かかる志向の下で嘗ての原則的論点との決定的差異——地主階級の「領導」の不可避性なども打ち出される中で、《長期延続的封建社会》の下での「歴史作用」というマクロな課題に関しては、未解決のままになっているといえよう。

結びにかえて

では、中国における明末農民戦争史研究は、今後、どのような方向性の下に進められていくのであろうか。この点についての私なりの展望とそれに触れた若干の所感を述べ、結びにかえることにしたい。

敢えてくりかえすが、明末農民戦争史研究が、明代の政治史・社会経済史研究の成果をも吸収し、軍事学など歴史学以外の分野からもアプローチされ、更には地方行政機関を中心とする在野の多くの人々にも担われていく状況は、今後一層進むのではないかと考える。そして、こうした諸部門・諸分野と従来の大学・社会科学院等の研究機関の作業との有機的連関がより明確にはかられる時、或は日本以上に《地域の視点》に徹した研究——例えば華北という大きな単位でなく省・府・州・県を基本的分析単位とするような研究も行われ、又その過程で、かの《長期延続的封建社会》の下での「歴史作用」についても或は解答の糸口が見出されるように思われる。「第二次全国明末農民戦争史学術討論会」は、研究上の新たな論点を提示するのみならず、そうした研究の総体に関わる方向性を内外に示すものであったのではないかと推察する。しかしながら、このように明末農民戦争史研究が将来豊かな内容をもつとしても、筆者には一つ疑問に思うことがある。それは——「討論会」においても感じられたことであるが——、明末農民戦争史研究が、そもそも一体何を明らかにする研究であるのかということである。例えば、明代の社会経済史研究の成果の吸収が説かれるが、逆にいえば、それを必要としなかった従前の明末農民戦争史研究には、固有の研究領域がはっきりと研究者に意識されていたと考える。それは、明末農民戦争を単に当時期の社会経済的矛盾の集中表現と見なさず、又同政治史の一齣としても捉えることを肯んぜぬ当時の研究者が、自ら設定した所の固有の領域と言い換えられよう。確かに、五〇年代から七〇年代にかけて、当該の研究は、前近代の農民戦争の総括点を無媒介に適用する傾向を強めていった。そうした姿勢に対しては強く批判すべきであろうが、しかし、当時の明末農民戦争史研究が、他の時代の農民戦争との関係を強く意識して進められたことそのものは、必ずしも否定されるものではないと考える。過ちを恐れずにいえば、明末農民戦争史の専門研究者の仕事というのは、最終的には、他の複数の農民戦争に関する検討をも加え、農

民の側から捉えた中国前近代の階級闘争の段階的な足跡或はそれにもとづくいわば、〈中国農民通史〉として、体系化されるべきものであったように思われる。[12]《農民戦争》を通して人間のいかなる営みが、又そのいかなる歴史的展開が当時追求されようとしていたのかについては、正確に把握しておく必要があるとともに、筆者は、その固有の領域に対する批判的継承が、先の周辺領域との交渉を深める中で行われる時、明末農民戦争史研究の真の再生への途は見出されるように思われる。言うまでもなく、こうした筆者の問題意識は、今日の日本における中国民衆反乱史研究が一つの曲がり角に来ていることを反映している。「第三次全国明末農民戦争史学術討論会」は、一九八九年河南乃至陝西省で行われる予定と聞く。このような問題についても、率直に語り合えることを望む次第である。

最後に、学会期間中私たちに随行しお世話頂いた四川省社会科学院外事科科長敖昌徳氏、同通訳の李大勇氏、並びに各種見学・交流会で先導の労をとって下さった綿陽市政協副秘書長姚衡氏に心から感謝の意を表したい。また、最初の訪中であった私は、山根幸夫先生・谷口規矩雄先生・佐藤文俊先生から一方ならぬ御厚情を賜わった。ここに記して、お礼申し上げるものである。

註

(1) 中国史学会編『中国歴史学年鑑・一九八五年版』(人民出版社 一九八五)

(2) 袁庭棟『張献忠伝論』(四川人民出版社 一九八〇)、四川省社会科学院『張献忠在四川』(社会科学研究叢刊 一九八一)等。尚後者は、四川省社会科学院『社会科学研究』編輯部主催の学術討論会「張献忠在四川」(一九八〇年三月三—六日)の報告集である。

(3) 著書『明末農民軍名号攷録』(四川省社会科学院出版社 一九八四)は既に日本でも刊行されており、最近では『張献忠大西軍史』(湖南人民出版社 一九八八)なる大著が出版された。後者については、山根幸夫氏が『明代史研究』第一六号(一九八八)の中で簡明な紹介を行っている。

(4) 佐藤文俊「中国における明末農民戦争史の研究動向——特に大順政権の性格論争を中心にして」(著書『明末農民反乱の研究』研文出版 一九八五。付篇第二節)等参照。

(5) 孫祚民著・吉尾寛訳「中国のマルクス主義歴史学と農民戦争研究」(滕維藻・奥崎裕司・王仲犖・小林一美編『東アジア世界史探究』汲古書院 一九八六。所収)

(6) 本年三月、佐藤文俊氏の「第二次全国明末農民戦争史学術討論会参加記」(『明代史研究』第一六号)、七月、谷口規矩雄氏の「第二回全国明末農民戦争史学術討論会参加記」(『東方学』

第七六輯）が発表された。共に、本稿で触れ得なかった点に多々言及されており、合わせてお読み頂ければ幸甚である。

（7）実際、九月六日の晩、孫祚民氏は日本人研究者との歓談の中で、本会の特色の一つは、軍事機関等々の非研究機関所属の者の発表をも組んでいることであると語っている。

（8）本書「後記」には、四川省社会科学院（王綱副研究員）を初め、中国第一檔案館、北京図書館、重慶図書館、四川大学、西南民族学院、四川省民族研究所、及び関係地方行政機関が、資料の収集・整理・編纂に協力したとある。

（9）今回、内容を紹介できなかったが、無論、綿陽市・梓潼県においても、同様の作業は進められており、その成果は『綿陽文史資料選刊』（中国人民政治協商会議綿陽市委員会文史資料研究委員会編）、『綿陽市地方志学会通訊』、『綿陽社聯』の中に、又『張献忠在梓潼』（中国人民政治協商会議梓潼県文史資料委員会編　一九八七・八）として発表されている。

（10）註（4）、及び拙稿「明末流賊研究についての覚書」（『江南女子短期大学紀要』一二　一九八三）、「明末農民戦争史研究に見る『孫祚民史学』上・下」（『歴史の理論と教育』五九・六〇　一九八三・八四）等参照。

（11）森正夫「『郷族』をめぐって」（『東洋史研究』第四四巻第一号　一九八五）

（12）孫祚民『中国農民戦争問題論叢』（人民出版社　一九八二）等参照。

（よしお　ひろし　江南女子短期大学助教授）

〔表１――日程並びに大会発言・部会討議の題目――〕

		論文番号
９月５日（土）午前（９:00～12:00）	開　会　式	
四川省社会科学院歴史研究所，綿陽市政治協商会議，日本研究者（東京女子大学山根幸夫教授）等挨拶		
同日午後（15:00～18:30 以下同様）	大　会　発　言	
山東省社会科学院歴史研究所	孫祚民研究員（64歳）：中国農民戦争史研究の近年の概況（提出論文ナシ）	1
鄭州大学歴史系	王興亜教　授（51歳）「李自成農民戦争与社会生産力関係的探討」（論文名。以下同じ）	2
南京軍区百科編輯室	呉耀陽正師職研究員「浅談張献忠五次進軍安徽」	3
南開大学歴史系	鄭克晟副教授（56歳）「試論“甲申之変”前後之山東一兼論“徳州事件”始末」	4
９月６日（日）（８:30～17:30）	梓潼県大廟（張献忠廟）史跡見学	
他「城南之戦遺址」（梓潼県長青郷），「廟垭之戦遺址」（同酒店垭，「倒馬坎之戦遺址」（同倒馬坎），		
９月７日（月）（8:30～12:00 以下同様）	部　会　討　議	
＜日本人研究者が配属された第４分会（分会数４）についてのみ記す。以下同様。座長は王興亜教授＞		
北京師範学院歴史系	彭雲鶴教授（52歳）「論清前期経済政策和経済思想同明末農民戦争的関係」	5
遼寧省社会科学院副院長	謝肇華副研究員（46歳）「明末農民戦争与民族問題」	6
重慶師範学院歴史系	趙全聡講　師（46歳）：明末清初期の階級矛盾と民族矛盾（提出論文ナシ）	
（発言）東京女子大学山根幸夫教授，大阪大学谷口規矩雄教授，都立大泉高校佐藤文俊教諭，江南女子短期大学吉尾寛，<論点：明末農民戦争における階級矛盾と民族矛盾の関係＞		
同日午後	部　会　討　議	
＜引き続き，階級矛盾と民族矛盾の関係について＞		
四川師範大学歴史系副主任	曽唯一副教授（54歳）「論張献忠性格」	7
（質問）吉尾寛：中国封建社会の長期継続と農民戦争の歴史的作用との関係（明末農民戦争に関して）		
（発言）北京大学歴史系許大齢教授，四川社会科学院歴史研究所王綱副研究員，中国社会科学院歴史研究所周遠廉研究員，王興亜教授，四川大学歴史系柯建中教授，		
９月８日（火）午前	大　会　発　言	
四川省教育学院歴史系	楊済堃教　授（60歳）「論李自成的迅速敗亡」	8
天津師範大学歴史系	賈乃謙副教授（57歳）「従張献忠・李自成的決策探索其失敗教訓」	9
河南大学歴史系	李肖勝研究生（23歳）「従郷土資料看李岩其人」	10
陝西師範大学歴史系	秦　暉講　師（34歳）「沙定洲之乱与大西軍入滇」	11
大阪大学教養部	谷口規矩雄教授「明末の土寇・堡寨に関する日本の研究状況」	
河北省社会科学院歴史研究所副所長	夏目正副研究員：明末農民戦争の歴史作用（提出論文ナシ）	
中国歴史博物館副館長	王鴻鈞教　授（61歳）：明末農民戦争と民族問題（提出論文ナシ）	
９月９日（水）午前	部　会　討　議	
（発言）王興亜氏：“堡寨・土寇”に関する前日の谷口報告に対するコメント 山根幸夫氏：元末農民戦争と堡・寨，或は元末農民戦争における階級矛盾と民族矛盾の関係 中国社会科学院歴史研究所馮佐哲助理研究員：清朝農民戦争（白蓮教反乱）における階級矛盾 谷口規矩雄氏：明末湖北の堡寨と李錦農民軍の関係，民族闘争の地域的特徴（江南・華北） 佐藤文俊氏：左良玉等所謂反動人物の研究の必要性		
同日午後（15:00～17:00）	大　会　発　言・会　議　総　括	
四川大学歴史系	冉光栄教　授（49歳）：農民戦争の歴史作用（提出論文ナシ）	
西南師範大学歴史系	黎邦正副教授（59歳）：「浅析張献忠思想的両重性」	12
遼寧省社会科学院	謝肇華副研究員：再び明末農民戦争と民族問題について	
山東省社会科学院歴史研究所	孫祚民研究員：今後の学会運営について	
江南女子短期大学	吉尾寛「王嘉胤反乱小考」	50
同日午後（17:00～18:00）	閉　会　式	
四川省社聯宋錫仁常務副主席，鄭州大学王興亜教授等挨拶		

〔表 2 ——他の提出論文——〕

［研究機関所属の若手研究者・院生の主な論文］

論文名	姓名	所属	職務等	年齢	論文番号
明末農民戦争初期在山西発展的原因	周荔	山西大学歴史系	副教授	46	13
李定国“扶明抗清”探源	李世宇	貴州大学歴史系	副教授	43	14
君主集権一元社会的普遍危機和周期性大動蕩	汪茂和	南開大学歴史研究所	講師	41	15
従張献忠《聖論碑》看大西政権的失敗	蔣志	綿陽師範専門学校政史系	講師	—	16
略論摇・黄十三家武装闘争的性質	李興栄	南充師範学院歴史系	助教	25	17
明末農民戦争期間河南地主土寨試探	陳連営	河南大学歴史系	研究生	23	18

［地方行政機関の学芸部等の論文］

論文名	姓名	所属	職務等	年齢	論文番号
清代前期的四川社会状況	張学君	四川省地方志編纂委員会	助研	42	19
	張莉紅	成都市社会科学研究所	—	—	
紀念張献忠戮力開発鳳凰山	陳賢柱	西充県人民政府	副県長	43	20
張献忠殉難西充鳳凰山	李仲華	西充県志辦公室	主編	38	21
張献忠領導的大西農民軍在栄昌・銅梁・永川・大足・壁山等地活動的資料	宋朗秋	大足県政治協商会議	主席	57	22
大西軍的大順通宝与興朝通宝	薛玉樹	金堂県労働局	助工	60	23
秦良玉与農民軍	周建華	石柱秦良玉史編輯委員会	幹部	29	24
張献忠死事考	張荷	《文史知識》編輯部（成都）	編輯	—	25
李自成撤出荊襄後的行軍路線及其戦略目的考略	曽歩賢	湖北通城県志辦公室	主編	34	26
李自成進入通山線路新考	毛彦斗	通山	—	—	27

［歴史作用問題］

論文名	姓名	所属	職務等	年齢	論文番号
張献忠農民起義歴史作用的再認識	胡昭曦	四川大学歴史系	—	—	28
	張茂沢	〃	研究生	23	
一個領袖・両種結局——論以李自成為代表的明末農民戦争的歴史命運	王松齢	四平師範学院歴史系	教授	63	29
	干鵬翔	〃	—	—	

［農民軍の活動と組織問題］

論文名	姓名	所属	職務等	年齢	論文番号
論張献忠的歴史地位和軍事芸術	王中興	中国軍事科学院	編輯	—	30
試論明末農民軍的郷族関係	陳巧	四川師範大学歴史系	助教	24	31

［大順・大西政権の性格と施策並びに「均田」の解釈問題］

論文名	姓名	所属	職務等	年齢	論文番号
試論李自成和張献忠在明末農民戦争的作用	姜暁萍	西南師範大学歴史系	助教	24	32
“皇権主義”思想対明末農民起義軍的影響——兼述李自成局隅北京急于称帝無決心収復東北——	楊暘	吉林省社会科学院歴史研究所明清室	—	—	33
呉三桂降清真相再探討——兼論大順政権失敗的主要原因——	張仁善	南開大学歴史系	研究生	23	34
明末農民軍“均田”口号再探	頼涪林	四川省社会科学院歴史研究所	—	—	35

［李岩の評価並びに地主階級知識分子・地主階級の役割問題］

論文名	姓名	所属	職務等	年齢	論文番号
李岩在北京事実新考	陳生璽	南開大学歴史研究所	副教授	55	36
朱元璋・李自成的成敗与知識分子的関係	朱徳林	南開大学歴史研究所	研究生	24	37
朱元璋和李自成起義異同浅析	黎時忠	湖北通城県委員会	副書記	46	38
論明末地主階級的動向与李自成農民軍的興亡	段渝	《歴史知識》編輯部	副総編	32	39
	徐学初	四川大学歴史系			
従明末農民戦争看漢族地主階級	方志遠	江西師範大学歴史系	講師	—	40
明末農民戦争与紳士階層的意識	山根幸夫	日本・東京女子大学	教授		47

［その他］

論文名	姓名	所属	職務等	年齢	論文番号
関于張献忠的幾個問題	阮明道	南充師範学院歴史系	副教授	55	41
張献忠起義軍在金堂	張誠毅	—	—	—	42
革左五営史事紀略	高洪鈞	天津師範大学図書館	—	—	43
張献忠年譜簡編	李登弟	陝西省社会科学院歴史研究所	副所長	56	44
李自成農民軍与明軍朱仙鎮会戦考実	智夫成	河南省社会科学院歴史研究所	副研究員	55	45
日本史学界研究明末農民戦争史的概況	馮佐哲	中国社会科学院歴史研究所	助研	46	46
“金・王之変”和与其相関之諸叛乱概要	谷口規矩雄	日本・大阪大学教養部	教授		48
福王府与明末農民反乱	佐藤文俊	日本・都立大泉高校	教諭(Ph. D.)		49